1 古代仏教の思想

▶ pp.153～157

憲法十七条（『日本書紀』巻 22）：現代語訳

一にいう，和を尊び，逆らい背かないことを心がけよ。人はみな党類を組み，また（物事の真実のありようを）さとる者は少ない。……

二にいう，あつく三宝を敬え。三宝とは仏･法･僧である。……

三にいう，詔（みことのり。天皇のお言葉）を承ったなら必ず謹んで従え。君をすなわち天とする，臣をすなわち地とする。……

四にいう，群卿（ぐんけい。上級官僚）・百寮（中・下級の官僚）は，礼を根本とせよ。民を治める根本は，必ず礼にある。……

六にいう，悪を戒め懲りさせ，善を励まし勧めることは古くからのよい教えである。それゆえ，他人の善を隠さず，悪を見たなら必ず正せ。……

十にいう，心にいだくいかりを絶ち顔色に出すいかりを捨て，他人が（自分と）異なる（見解をもつ）ことに怒ってはならない。人はみな心をもち，心にはそれぞれこだわるところがある。……私がきっと聖者（しょうじゃ）ではなく，相手がきっと愚者でもなく，ともにまさに凡夫（ぼんぶ，ぼんぷ）なのである。

月の兎（うさぎ）―仏の物語の受容

昔，天竺（てんじく。インド）に兎と狐と猿がいて，ともに菩薩の修行にはげんでいた。帝釈天（たいしゃくてん。インドの神の一種）がこれを知り，彼らの心を試そうと，無力な老人の姿となって現れた。「私は老いて貧しく，身寄りがない。私を養ってくれないか」。これを聞くと，猿はさっそく木に登って木の実を取り，里に出て野菜や豆，穀類を取ってきた。また狐は，墓場で供え物のご飯や魚を集め，老人は満喫（まんきつ）して猿と狐の心をほめた。

一方，兎は日々野山をかけめぐったが，人間や他の獣に襲われることを恐れ，何も手に入れられなかった。猿・狐・老人に笑われ辱められた兎は，あるとき「これから甘美な食べ物を持って来ます。薪（たきぎ）を拾い火をおこして待っていてください」と言って出て行った。猿と狐が火をおこして待っていると，兎が手ぶらで帰ってきた。猿と狐が「私たちをだまして火をおこさせ，自分は暖まろうというのだな，ああ憎たらしい」と言うと，兎は「私は無力で食べ物を取ってくることができません。私の身を焼いて食べてください」と言い，火の中に踊り入り，焼け死んだ。

帝釈天はそのとき，もとの姿に戻り，生きとし生けるすべてのものに見せるべく，火に入った兎の形を移し，月の中に籠めた。月の表面に雲のようなものがあるのは，兎を焼いた火の煙なのである。また，月の中に兎がいるというのは，この兎の形なのである。

（『今昔物語集』巻５　第 13 話による。玄奘（げんじょう）が記した『大唐西域記（だいとうさいいき）』によれば，ここで語られる兎は釈迦仏の前生であるという）

2 鎌倉仏教の思想

▶ pp.158～164

法然のことば

【原文】　又云（いわく），念仏申す機は，生（うま）れつきのままにて申すなり。さきの世のしわざによりて，今生の身をば受けたることなれば，この世にてはえ直し改めぬことなり。たとへば女人の男子にならばやと思へども，今生のうちには男子とならざるがごとし。智者は智者にて申し，愚者は愚者にて申し，慈悲者は慈悲ありて申し，邪見者は邪見ながら申す，一切の人みなかくのごとし。さればこそ阿弥陀ほとけは十方衆生とて，広く願をば発（おこ）しましませ。

（「禅勝房にしめす御詞」）